

国民を地図化する

—序—

ベネディクト・アンダーソン*
(ラファエラ・デワンタリ・ドウィアント**訳)

Benedict ANDERSON
Introduction
In *Mapping the Nation*,
ed. by Gopal BALAKRISHNAN, 1996, pp.1-16. Verso

少なくともこの 200 年間にナショナリズムが世界中に現われているということについては、異論がないであろう。この長い期間を経て、ナショナリズムに関して、確実に、しかも広範囲にわたる理解が得られたはずである。それにもかかわらず、どのような政治的現象であっても、ナショナリズムほどに不可解であり、分析面で意見の一致を見ていないものはないであろう。ナショナリズムについて、広範に受け入れられる定義はない。ナショナリズムの近代の型と古代の型をはっきりと説明できる者もない。さらに、ナショナリズムの起源に関して見られる意見の不一致は、不安定なナショナリズムの将来に関連している。ナショナリズムの世界的な拡がりには、悪性の病気の転移のように読み取られているだけでなく、すぐれてアイデンティティと解放をあらわすものとしても理解されている。そして、上述のプロセスがどこから始まったか。新世界からか、それとも旧世界からか。今日、適切な答が得られない新しい問い、すなわち「ナショナリズムはどれほど男性主義的なものであろうか」という問いを発することができる。ナショナリズムの普遍性はどのようにしてその重要な要件である個別性と調和させることができるか。ナショナリズムを徹底的に探究するには、どの専門分野が最も適切であるか。歴史学、心理学、政治経済学、社会学、文化人類学、哲学、文芸批評、それとも他のものか。次のことを考えるとますます不安になる。この 200 年以上にわたってナショナ

リズムが世界の政治に重要な役割を果たしてきたにもかかわらず、マルクス、ニーチェ、ウェーバー、デュルケイム、ベンヤミン、フロイド、レヴィ=ストロース、グラムシ、フーコなどのような影響力の大きい哲学者たちは、なぜこれに関してほとんど発言して来なかったのか。

こうした不可解なことがそれだけで意味しているのは、ナショナリズムの地勢を地図化しているアンソロジーの著者たちが、力を合わせて立ち向かうよりもむしろ、互いに背中を向けて、それぞれのあいまいな地平線を見つめているということである。したがって、ここでもし簡単な紹介を行なうとしたら、それはナショナリズムについて何らかの一般的な輪郭を描くにとどまるであろう。

ナショナリズムに関しては、哲学的な諸困難がずっと存在している。「あらゆる民は国民であり、それ自身の国民的性格とそれ自身の言語をもつ」という有名な言葉を吐いたヘルダーでさえ、かろうじて『人類史の哲学理念』という世界史に関する膨大な 4 巻本の著者として、あらゆる国民の無比性を主張したと位置づけられている。啓蒙時代から今日に至るまで、ヨーロッパの偉大な思想家たちが考えた自明の枠組——いわば人類および世界史あるいはそのいずれか——は普遍的なものであった。ヘーゲルは、シュトゥットガルト市とベルリン市の間ほんの 500 マイルの地域を軸にして、その勤勉な生涯を過ごした。しかし、ポスト・ルネサンスのヨーロッパ拡張期にみられた 350 年にお

*コーネル大学 **東北大学・院

よぶ出版資本主義は、古代から現在までの社会をまったくそのまま彼の書齋に持ち込み、彼の熟読、熟慮、理論的総合の対象となったのである。この革命（フランス革命には至っていない）が始まった時には、あらゆる鍵概念、すなわち、進歩主義、自由主義、社会主義、共和主義、民主主義、さらに保守主義、正統性（レジティマシー）、後世のファシズムさえもがグローバルの文脈で理解された。興味深いことに、ナショナリズムに関しても同様であった。ナショナリズムについて時期が熟したときに、「国際連盟」に対して不思議に思う人は一人もいなかった。そして、マッツイーニがこの国際的な組織の父だと、ロイド・ジョージは平然と言いえたのである。このような考え方は、ヨーロッパだけに見られたものではない。1980年代末に、インドネシアの偉大な現代作家であるプラムディア・アナンタ・トウールは、インドネシアのナショナリズムの起源について大部の4部作を著わした。彼は主人公を「あらゆる国民の子」として叙述したのである。そうこうしているうちに半世紀が経ち、その間に、地球の全域で無数の人々が自分の国のために命を犠牲にしたのである。徐々に明らかになってきたことは、ナショナリズムを考察する際に、グローバルの文脈の中に置きながら、常に比較の観点をもつことが不可欠であるということである。同時に、ナショナリズムを個別の文脈に置かない限り、それを考えたり、それに対して政治的に行動をすることも不可能であるということがわかってきた。

こうしたナショナリズムの二つの文脈、そしてそれがもたらす理論的混迷は、ナショナリズム、そしてその中断およびエネルギーの噴出に関する真剣な歴史的考察を説明する手がかりになるであろう。保守的なヨーロッパが平和であった100年の間（1815年～1914年）、ごくまれにしか、しかも僅かな人しか、ナショナリズムに関して理論的な興味を示さなかった。しかし、この期間は有益であった。ここではまず、上記の期間にもっとも聡明な活動を行なった二人をとりあげよう。

ナポリ生まれで、後にオックスフォード大学の最初の欽定講座担任教授になったアクトン卿は、1860年代にナショナリズムの急を報じた。因みに、1860年代はイギリス帝国の権力が絶頂に至った時代であるが、それ以前に、1848年にヨーロッパでは広域にわたっ

て動乱が起こり、マッツイーニとガリバルディーがそれぞれ教皇制度、ナポリ王国に対して革命を起こし、アイルランドおよびアメリカではフェニアン団が立ち上がり、そして、国家主義者ファレスがメキシコ市にハプスブルク王朝をうち立てようとしたメキシコ皇帝のマクシミリアン皇子の企てを見事に挫折させたのである。普遍的な正統性（レジティマシー）原理の啓発的な擁護者として、アクトンは、「ナショナリティ」と彼が呼んだものが、三つの破壊的な性格をもっている近代の観念のうちで、「現在では最も魅力的な観念であり、さらに、将来の権力として最も可能性のある観念である」¹⁾ことを認識した。彼の見解では、「主権国家というものは、イギリスとオーストリア帝国のように、はっきりと識別できる様々なナショナリティを抑圧せずに受け入れる実質上最も理想的なものである」。というのも、「劣等的な人種は知的に優れた人種との政治的な併合の中で引き上げられるからであり」、「疲弊し衰退した国民は、若々しい生命力のあるものと接触することによって、生き返るからである」。『代議制統治論』の中で、ジョン・スチュアート・ミルは次のように書いている。「一般的にいうと、あらゆる国の行政権の境界は概ねナショナリティのそれと一致するというのが自由制度の必要条件である。」と。アクトン卿はこの説に対して批判的であった。彼によると、この概念はフランス革命からの悪しき残余物であり、推論的、抽象的、一元的な観念に基づいて国家を作り上げるという「近代」の一般的傾向から派生したものである。（さらに皮肉にも、上述の推論的、抽象的、一元的な観念には、量的なものを賛美する観念が含まれている。）アクトン卿が示したこの「近代」の一般的傾向は、革命的で絶対主義的政治へ導き、立憲君主政権を倒し、真正の自由の多元主義的な基盤を破壊したのである。むろん、「人種の浄化」を唱えて行われた旧ユーゴスラヴィアでの虐殺は、アクトン卿にとって予言の最悪の実現であっただろうし、保守的な欧州共同体（EC）の誕生にたいしては、予言者として喜々として目撃したであろう。

第一次世界大戦が勃発したとき、普遍的社会主義の擁護者で、ウィーンの労働学校の講師であったオットー・バウアーは、比較の観点に立った大部な本を書いた。この本の中で、彼は、正しく理解されるなら、社会主義と国家主義とは矛盾なく両立できるということ

を理論的に示す試みを、さらに、オーストリア＝ハンガリー二重帝国の存在を脅かした国家主義的な闘争を、大オーストリア合衆国 (VSGO) という超国家的で、社会主義的なプロジェクトで生産的に超越することができるということを実践的に示す試みを行った²⁾。(驚くべきことに、出版されてから90年経った今日でも、大きな影響力をもつ彼の傑作である『民族問題と社会民主主義』は英語に翻訳されていない。)³⁾「永遠の国民精神の型」にこだわるあらゆる反動的な観念——たとえば19世紀に、タキトウスの有徳の英雄であるアルミニウスを、シュヴァルツヴァルトに建っているグロテスクな巨人の「ヘルマン」記念碑にまつりあげたことを講えるようなもの——に逆らって、パウアーは国民というものが歴史の所産であり、長期間におよぶ異なった集団間での社会的・性的交わりに基づいて生み出されたものであると、と主張した。ドイツ人はスラヴ民族、ケルト民族、チュートン民族が自由に交わってきたものであり、20世紀はじめのドイツ人は神聖ローマ帝国の臣民よりも、現在のフランス人およびイタリア人の方が共通点が多く、また彼らからより多くのことを学ばなければならなかったのである。さらにパウアーによると、国民とは大転換期の所産であり、そこでは、あらゆる古代の独立したコミュニティが崩壊し、読み書き能力に基づいた抽象的で高度な文化を土台にした連帯感を必要とする近代の産業社会が現出した。これは後述するアーネスト・ゲルナーの考えを前もって部分的に示すものであった。労働学校の経験を生かして熱心に執筆活動を行なった彼は、野蛮な資本主義が労働者のローカルな農民文化を彼らからもぎ取っただけでなく、主に上、中流階級が創造した国民文化に労働者がアクセスするのを不可能にさせてしまった、と主張した。彼によれば、これは、工場システムが労働者たちを使い尽くし、きわめて悲惨な無知の状態に縛りつけてしまったからだ。したがって、彼らを暗黒の状態から救い出して、啓蒙へと導くことが社会主義の歴史的課題となった。同時にパウアーは、当時左翼が支持していた考え、すなわち、社会主義の勝利が、均質で同型の世界主義を生み出すという考えに反論した。彼は、あらゆる近代国家の産業資本主義の経験が類似していたが、全く同じものではなかったことを例示的に述べることによって、共同性と類似性の区別をはっきりさせた。ここでいう共同性とは、階

級の違いを超え、彼が言っている「運命の共同体」において個々の集団を結びつけるものである。さらに「運命の共同体」とは、半ば形而上学的な文脈で古代の悲運として捉えるのではなく、未来に対する意志の共有として理解される。そして現実の生存競争の中で常に変化していくこの意志は、言語および日常生活の慣習を共有し、文化を共有し、ついに政治制度の共有を通して、パウアーのいう国民的性格へと仕立て上げられるのである³⁾。

アクトンの立場、さらにパウアーの時代より半世紀前にマルクスとエンゲルスによって強く打ち出された『共産党宣言』の立場に対するパウアーの立場ほど目立っているものはない。アクトンとパウアーは、どちらもナショナリティを国家から切り離すことを望んでいた。ナポリ生まれの、保守的なイギリス人であるアクトンは、(非歴史的に、そして概ね非文化的に)国民が「単に自然なもの」とみなし、それゆえ倫理的な正統主義国家を国民に課す必要があると考えていた。そういうわけで、モダニティのニヒリスティックな力が及ぶのを防ぐ防波堤としてのハプスブルク王家の帝政は、絶滅の危機に直面することになった。他方、パウアーの主張では、国民と国家はどちらも歴史的に形成されたものであるが、国家よりもむしろ国民的性格と文化が価値の源泉となる。したがって、ハプスブルク王家の統治の意義は、慣行および制度の歴史的殻を偶発的に作り上げたことにある。その殻の中から社会主義的なナショナリティの連合が現われ、そして、最後にはあらゆる国家が衰退する方向へ向かって行くのである。逆に、資本主義的世界市場があらゆる国民的文化を消滅させるという『共産党宣言』にみられる見地に対して、パウアーは、進歩的な社会発展がある文化の担い手と別の文化の担い手との接触を密にさせ、それぞれの文化のレベルを高め、人間の社会的性格の分化を促す、と考えた。そして、社会主義の役割は、上述の傾向を打ち消すことではなく、資本主義が生み出した最も先進的なレベルでの物質的な生活の標準化を普及させることである、と考えた。(このようにして、ブルジョア階級だけが国民を国家権力に属させるのである。)

1918年以來、全てが急変してしまったように見える。ホーエンツォレルン王家、ハプスブルク王家、ロ

マノフ王家、およびオスマン王家などの帝国の崩壊は正統性の正当化を終わりにさせた。そして、大オーストリア合衆国の夢をくじいたのである。周辺の破片部分から、中東ヨーロッパでは弱小で、ほとんど農業的といえる国民国家のうねりが見られ、近東では植民地と保護領が塊りとなって現われた。戦勝者たる大ブリテン・北アイルランド連合国でさえ、やがてアイルランドのほとんどを失ってしまったのである。同時に、英国のドイツ発祥の王室はウィンザー王家になった。国際連盟の結成によって、なおも存続していた帝国さえも横並びの普通の国のようになり、新しい国際的な正統性が確立されたように見えた。

しかし、最も決定的なできごとは、ボルシェヴィキがペトログラードの政権を手にしたことであろう。そして、彼らは旧ツァーの領土で安定した反資本主義の秩序をうち立てることに見事に成功したのである。出来たばかりで、孤立無援の状態に置かれていたソヴィエト連邦（以下、ソ連と略称）は国際連盟に加入したが、自分たちのことを国民国家とは見なしていなかった。ソ連の当時の敵国もそのことに関して同じ考えだった。他の国々の見るところでは、ソ連はパウアーの夢のようなものを手に入れた。すなわち、ソ連の大部分のナショナリティの領域と文化を正式に承認した上で、それらを一つの全体的な企てに完全に従属させることによって、ナショナリズムの問題を乗り越えたのである。まさにこの企ては、地球の隅々にまで散らばって住んでいた無数の人々の忠誠心を魅了したのである。ボルシェヴィキ思想に対して、二つの競争的で対抗する力を持つ普遍的なものが現われた。一方では、資本主義的民主主義、すなわち「西欧」であり、他方では、ファシズムである。ローカルなレヴェルのファシズムがナショナリズムを食い物にしたことは否定できないが、忘れてはならないのは、それが世界的なユダヤ民族、ボルシェヴィキ思想、自由主義などを向うにして、超国家的な勢力として世界中を魅了したことである。それゆえ、両大戦間期にハンス・コーンとカールトン・ヘエズ、さらにその弟子らによって行なわれたナショナリズムに関するもっとも重要な研究は、善（西欧／民主主義）対悪（東欧／独裁主義／ファシズム）という、普遍的な二項対立によって体系化された⁹。ロンドン、パリ、ハーグなどのすぐれたヨーロッパの首都が以前はヨーロッパを超えた専制君主国家

の中心であったということは、取るに足らない。

ヨーロッパのファシスト政権および日本の軍事政権の崩壊は、ポスト 1918 年状況を大きくは変えなかった。アメリカもメンバーになった国際連合にソ連が加入したにもかかわらず、冷戦時代の世界の政治的秩序は超国家的な文脈で理解されていた。たしかに、スターリンは当時彼が支配していた東ヨーロッパと中央ヨーロッパの一部をソ連に編入することに反対した。こうして、初めて共産主義諸国家が出現したのである。これらの国々は見かけ上は国家ではあるが、弱小の国家で、中心国家に従属している同盟国と見なされた⁹。

（1950 年代末までは、巨大な中国でさえ一般にはこのように考えられていた。）他方、西ヨーロッパを完全に支配していたアメリカも世界史的には国民国家としてよりも、世界的な反共産主義連合の傲慢な中心と見られていた。アジアとアフリカにあるヨーロッパの植民地は 1945 年から 1975 年にかけて独立したが、しばらくの間、状況は変わらなかった。というのも、これらの新興国家は、両大戦間期にヨーロッパで出現した新興国家と同じように、たいていは貧弱な農業国であり、国内の争いで分裂状態にあったからである。しかもそうした争いは世界の枢軸に沿って解釈され、あやつられていたのである。

私たちが現在生きている時代は、少なくとも象徴的には 1960 年代に始まったといえよう。貧弱な周辺国の二つの国から生じたナショナリズムの世界的な影響がその前兆となった。巨大なアメリカに対して、小さなヴィエトナムの英雄的な戦いは、テレビという新しいメディアによって、世界中に絵をみるように放映された。これまで「周辺の」なナショナリズムによって支えられることのなかったこうした戦いは、アメリカに限らず、フランス、ドイツ、日本そして他のどのような所にも異変を促した。このようにして、1968 年は 1848 年のような奇蹟的な年となった。同じ年に、ブレジネフの装甲車は、共産党支配下のチェコスロヴァキアで見られたプラハの春を残忍にも圧殺した。この行動によって、以後ソ連のプロジェクトは長期間にわたって相当の影響を受けた。同じ時期に、アメリカでは新たな運動の高まりが見られた。まず、市民権運動が起こり、続いて黒人ナショナリズム運動が起こり、これはやがて国境を超えた運動になった。さらに、新

しい型のフェミニズム運動が始まり、これも世界中に広がっていった。ストーンウォール運動は同性愛の解放を目ざす初めての大陸横断の運動であり、当座は「同性愛の国家」を目ざしていた。旧ヨーロッパでもまた、超国家的コミュニティを結成しようとする動きが、北アイルランド、スコットランド、ベルギー、カタール、バスク地方などで見られた既定の国民国家に対抗する戦闘的なナショナリズム運動と手を携えた⁹。1980年代後半に入って、ソ連はつぶれかかっていた。そして20世紀の共産主義の遺物は、うろたえる鄧小平の後継者たちに引き継がれた。その間、国内外に対して普遍的なプロジェクトを提起しなかった日本は、世界で第二の経済大国になった（むろん、このように言うのがまだ妥当であるとして）。政治的な変動がこのように急速に、しかも数多くの場所で起こり、将来の見通しがこれほどまでに不明確な時代は、これまでなかった。

上述の変動とは別に、より静かではあるが、将来に甚大な影響を与える変動が起こりつつあった。18世紀のケーニヒスベルクで静かな毎日を送っていたカントは、貿易が世界的に良質な影響力をもつものであり、この貿易を通じて世界がいつか恒久的な平和に至ると考えた。（その間に、この同じ「貿易」によって、数百万人の黒人奴隷が船で大西洋を越えて運ばれていたのである。）カントがそのように考えることができたのも、当時は産業資本主義がようやく立ち現われ、ヨーロッパ大陸から西への移住も始まったばかりであり、しかも、鉄道が夢の中にも出てこない時代であったからである。いっそう若く、アダム・スミスの作品により精通しており、しかもよりすぐれた予言者的な本能を持っていたヘーゲルは、進行中の経済革命がもたらす社会的、政治的な影響について既に早い段階で警告を発していた。そして彼の近代国家論の中には、市場が解き放ちはじめたアノミー的力を抑制し、閉じ込めようとする考えが見られ、それはまさに彼の経済革命への警戒を示すものであった。次の世代のフリードリヒ・リストは、それぞれの国境を維持し守ることのできる権力を生み出すような国民経済の形で、初期資本主義と近代国家とを再編成するために、ある種の政治的変動が必要であると真剣に考えた。資本主義の、革命的といえる広範囲に及ぶ活力を誰よりも理解していたマルクスでさえ、リストの仮説に全く影響さ

れていなかったわけではない。「いずれの国のプロレタリアートも、当然、まずそれ自身のブルジョワジーをかたづけなければならない」という有名な説に従うなら、上述の国々はリスト的な国であり、小スイス、小ベルギー、小ポルトガルのことではない。

少なくとも国際連盟の結成までは、国民経済の観念は一般に認められており、それはたしかに自己決定の原則の根拠となった。この国民経済の観念を最初に吹き飛ばしたのは世界恐慌であった。この大恐慌は全ての国で同時に起こり、関税障壁をどんなに高くしても緩和することができなかった。しかしながら、国民経済は同時に労働力のある程度の地理的固定化と、その領域を支える情報システムにある程度縛られるという事態を招いた。（印象的に思われるのは、ヨーロッパの外にある植民地で編成された膨大な労働力のフローが、当時、理論的な注目をほとんどあびなかったことである。）自己決定をより可能にするためにヨーロッパの地図を完全に書き直すべきであるという意見は、まさに、いうなれば、ポーランド人がこれからもポーランドに住み、ポーランド語の新聞を読み、ポーランド政治に参加し、ポーランド経済を打ち立てるということ仮定していた。大部分の左翼がこの準拠性を支持したのは、経験から見て、初期のソ連を除いて、労働者階級が手にした重要でかつ長期的なものが、工場の中でよりも、「国民」議会において、しかも議会の法律制定を通して得られたものであったからだ。それゆえ、「国有化」ということばが、経済部門から私有財産の支配という状態を実際かつ計画的に取り除くという意味で広く用いられたのは、全く無邪気であり無意識的でさえあった。いうなれば、「国有化」は社会化と同義語であった。しかし、その時には既にフォードの時代、自動車、ラジオ、そして飛行機の時代がやって来ていたのである。

第2次世界大戦がもたらした広範囲の荒廃状態の後に、社会主義国家が完全に立ち現われるまでには少し時間がかかった。赤軍の軍事的な成功は、ソ連の影響力をヨーロッパに深く植えつけた。アジアでは、世界で最多の人口を抱える中国が、中国共産党の指導によって市場のとどかぬところに行ってしまった。政治的な理由もあって、共産主義が支配するそれら両大国の国家経済は、労働力がそれぞれの生産領域外に流れることを堅く禁じていた。資本主義の西欧にとって、ヨ

一ロッパを超えた統治権を維持することが不可能となった。共通にもつ政治的・経済的もろさは、19世紀半ばのドイツおよびイタリアの小国で見られたのと同じような影響を与えた。この観点から考えれば、続いて起こる欧州共同体（EC）の結成は、後期資本主義の時代に向けて更新されたリスト主義であるといえる。アジア、続いてアフリカで新たに独立した旧植民地国では、1918年の仮説はとりわけ「国有化」という名目の下に正当な地位を獲得した。

しかし、1970年代から80年代初頭には、後期資本主義の影響力をくい止める壁が、私たちが見慣れた過程で崩れてしまった。貧乏になった旧植民地国から移動した膨大な量の移民が、豊かな資本主義枢軸国へ流れていった。それらはまず、西欧、アメリカ、元自治領であり、続いて近年は日本、石油富国の中近東、東アジア及び東南アジアの新興工業国（NICs）であった。スターリンと毛沢東の「大陸システム」は衰退しはじめ、結局は崩壊してしまった。エレクトロニクス革命は高度な情報システムを発明した。この情報システムは最も勢力のある国家のコントロールさえも逃れ、まったく30年前に考えられなかった規模とスピードで金融資本が機能するようになった。国境を超えた生産システムが支配的になりつつあり、旧式のフォーディズムも分権化した国外の生産システムと高性能で、非常に柔軟なニッチ・マーケティング・システムに道を譲るようになった。（この早い段階での陰うつな徴候は1960年代に爆発的に立ちあらわれた世界中の麻薬売買である。これは現在も取り締まれない状態である。）19世紀のドイツの労働関税同盟システムがたとえどのように考えられたにしても、安くて早い交通機関が全く先例のない、世界中にまたがる人口移動を可能にした。

こうした変化の結果、ナショナリズムはいま二つの新しい形で、しかも何をもたらすかは誰もわからない状態で現われている。いうまでもなく、一つの形態は、旧ソ連の残りから現われた、弱小の経済的にもろい、寄り合い世帯の国家の形成である。それらは新しく現われた国家もあれば、1918年の条約の残りの部分から現われた国家もある。あらゆる観点からみて、これらの国々はどれも75年遅れて現われたのである。（しかし、こうした形のナショナリズムは地域特有のもの

であり、世界秩序を脅かすとは考えにくいといえる。）もう一つの形態は、二世紀にわたって国家と国民を結びつけてきたハイフンの差し迫った危機である。上述のハイフンの絶頂期に、ナショナリズム運動は自分たちの国家の建設を夢見、この国家が繁栄、福祉、安心感を与えるだけでなく、国家を通じて誇りと国際的な承認も得られると信じていた。他方、これらの国家は、国家のメンバーとして自覚している人々の服従と全面的な忠誠心によって支えられると仮定された。このような仮定が長期的に残っていくかどうかについては、きわめて不確かである。「アイデンティティ」という名目の下で解釈される移動可能なナショナルリティが、世界中の人々の移動性の高まりとともに急速に頭をもたげている。

第2次世界大戦が起こる直前までは、軍事技術の発展は非常にゆっくりとした歩みであった。さらに、軍事費も低かったので、多くの国民国家はある程度互いに競り合うことができ、またそうしなければならないと考えていた。（その時、どこにも見られない封建社会から立ち現われてきた日本は、フォードのアメリカよりも、すぐれた戦闘機をつくることができた。）フランス革命とその敵対者のプロシアが新しく取り入れた制度である「徴兵制度」がまた一般的に見られた。自国の防衛に一般市民（男）が参加することは、国民国家の間断ない維持に欠かせないものであった。こうした制度は現在ほとんどなくなっている。現在、世界の200以上の国民国家の中で軍事的革新を行うことができるのはほんのわずかでしかない。他の大部分の国は、無秩序な格安の世界市場で、小さな企てをもつ海賊や、募占状態に置かれている消費者、または廃品回収者としてあとについていく。（たとえば、中国のはるか西の方では、人民解放軍が旧ソ連の軍用品で重装備した軍司令官を無視して行動できないような地域があるとされている。）技術の発展により、徴兵制度は時代遅れになった。軍の力で市民を守ることでできない国家や、市民の雇用とよりよい生活を保障するのに四苦八苦している国家は、女性団体や学童のカリキュラムを規制するのに忙しいかもしれないが、このようなことで統治権の尊大な主張をいつまでも続けることができるであろうか。

最後に次のことを考えてみよう。1945年までは、政治的、社会的、経済的闘争はどんなに激しい闘争で

あっても、半ば憂い顔でユートピアというしかない体制内で起こった。むろん、左翼は、資本主義を乗り越え、克服する日がいつか来ると信じていた。しかし、右翼の側でさえ、ボルシェヴィズムやユダヤ人の撲滅はまことしやかな魅力を放っていた。こうした時代は原子力時代の始まりによって終わりを迎えた。次のようにいえるであろう。1960年代には、ワシントンは数時間でボルシェヴィズムを破壊する能力を実際に持っていたし、モスクワは同じ早さで現存の資本主義を除去する能力を持っていた。歴史の中で初めて負のミレニウムが見えてきた。その間の数年間に、原子爆弾による地球の自滅に加えて、他の「死の警告」—オゾン層の破壊、生物多様性の減少、人口問題、エイズのような伝染病—が現われた。

先に述べたアクトンとパウアーの歴史的な介入の政治的な状況を思いだすならば、ポスト1960年代にナショナリズムに関して膨大な量の、質の高い著作が誕生したのは驚くにあたらぬ。これらの作品は様々な観点と関心を示している。それらの著者は全て知識人であり、彼らの著作も広く認められている。ここで、先に概観した状況の中に位置づけながら、それら著者を何人が紹介しようと思う。

いうまでもなく、上述の状況の起爆装置になったのは二人のチェコスロヴァキア人である。二人とも第2次世界大戦および原子力時代以前の生まれであり、一人はブラハで、一人はほとんどロンドンにいて仕事をしていた。まず物故者のアーネスト・ゲルナーは、1960年代半ばに既に、ナショナリズムは本当は静的な農業社会から産業・機械的情報社会への大転換に対する必然的で全面的な機能的反応に過ぎないとする、影響力があり、因習打破主義的な理論の推敲をはじめている。これには、標準化した「高度な文化」（それは原国家的なものに扮している）の普及をともなった。それは、分業と社会的移動が非常に進行した状態の下で人々が生き残れるようにするために、国家が取り決め、資金調達をした教育システムを通して制度化された。ヨーロッパ型コスモポリタンの啓蒙精神の中で、ゲルナーはナショナリズムを上から、グローバルかつ社会学的にみており、「国民文化」と結びついた「感情的なこと」にはほとんど関心を抱かなかつた（彼が私的に慰めを必要としたときに、チェコの民謡を歌っていたこ

とはたまに認められたが）。その間、ブラハでは伝統のあるチャールズ大学で教えていたミロ斯拉ヴ・ホローチが、歴史・社会学的な比較研究の成果を発表していた。この先駆的な著作は、「ドブチェックの「人間の顔をした共産主義」とこれに対するモスクワの弾圧という形であらわれた東ヨーロッパ中央部の小国の非常に特殊なナショナリズム運動に関するものである。そのことを認めた上で、ホローチの著作の特徴は、おそらくゲルナーが無視したこと、すなわち上述のナショナリズム運動にとってタイミングが様々であること、またそれらの社会的土台と経済状況も多様であることをまさに主張した点にあるといえよう。さらに彼はゲルナーに抗して、国民はまさに人類学的構成体であり、ナショナリズムの台頭と近代産業社会との関連は弱くて、不確かなものであると主張した。

1970年代初期に、それまでのたいていの期待に反して、西ヨーロッパ（スコットランド、ベルギー、バスク地方、そしてとりわけ北アイルランド）では、ナショナリズムの復興を経験しはじめていたが、その時に、ポスト帝国と見なされていたロンドンで、アンソニー・スミスは、ナショナリズムとナショナリティに関して、一連の複雑多岐にわたる著作を書きはじめた。それらの著作も反ゲルナー的な精神で書かれている。スミスは、いくつかの重要な点でナショナリズムが近代的な現象であることを十分に認めた上で、ナショナリズムが機械的に扱われ、無から生じたものであるとされるなら、その訴えは真面目に理解され得ない、と主張した。彼の歴史的な立場からすれば、ナショナリズムは必然的に、しかも当然により古い民族の共同体を土台にして生まれるのである。因みに、おそらく偶然であろうが、上述の民族共同体の最も適切な例はアルメニア人とユダヤ人の共同体である。

1980年代に入って、上述のような一連の立場に対していろいろな視角から批判的な再検討がなされた。その中からここで二人の重要で対照的な議論を取り上げよう。マンチェスターのジョン・ブリューリーは、ナショナリズムのまさに政治的な性質を強調することによって、ゲルナーの社会学主義とスミスの継続主義の両者を批判した。彼は事実上、ゲルナーの観点では「後期の農業」社会におけるナショナリズムへの実際の移行を説明できない、と論じた。さらに、なぜ、民族共同体によってナショナリズムが起こったり起こら

なかつたりするのか、そして厳密にどのような歴史的状況の下でナショナリズムが起こるかという質問に対してスミスは全く答を出せない、と述べた。その結果、彼は二つのことを強調した。一つは、政治的な仲介者の重要性であり、いま一つは、制度的環境と地政学的環境を対照させる際に、その仲介者たちを通じて示される具体的な政治的利益である。

他方、特殊命題の研究集団の一員であるパーサ・チャタージーは、帝国主義と植民地支配についての基本的な問題を提起することによって、ゲルナー（とその他の者たち）を批判した。ゲルナーの議論によると、「啓蒙」の産業的モダニティがナショナリズムを生んだのだが、この産業モダニティこそ、フランス革命後の一世紀半の間にヨーロッパの世界支配を支えたのである。したがって、ナショナリズムはそうした支配の重要な部分として理解されねばならない。ネルー、スカルノ、エンクルマなどのような地域的なリーダーがナショナリズムのもつ高潔さと自律性をどれほど主張したにしても、後期の植民地時代とそれ以降に出現したナショナリズムは非真正的なものと見なされるべきである。ヨーロッパの外の世界では、ナショナリズムは必然的に「他から来た言説」であって、それは、利己主義的で、結局のところ敵に協力する「民族主義」的政治家、知識人、官僚、資本家によって支配されたままのコミュニティの中から内発的で自律的な開発が立ちあらわれるのを妨げるものであった。因みに、チャタージーは最近立場を変え、その主要な標的をゲルナーから筆者の著書『想像の共同体』に移している。そしてアジアやアフリカのエリート・ナショナリズムに対して、以前の著作に見られたものよりはややゆるやかな評価を与えている。

以上、簡単に論じた著者たちは、基本的にナショナリズムの歴史的性格、起源、勃興に関心を抱いており、したがって、精神的にはソ連の崩壊前の時代に属している。次に取り上げる学者たちは、世界の新秩序下でのナショナリズムの将来に興味を示している。

世代的にはゲルナーの孫にあたる若き学徒ゴバル・バラクリスナンは、きわめて重要なつなぎの役割を果たしている。つまり、一般的な社会構造の継続として理解される歴史の中の「特殊な人々」の役割を確定する際に、ヘーゲルとマルクスが直面した困難について

の批評から始まって、『想像の共同体』についてのニュアンスに富んだ批判へと移っている。そして最後に集合力の土台として、先進資本主義世界の政治における国民と階級の複雑な関係について説得的な考察を行っている。

ごく近年まで、ナショナリズムに関する理論的研究はジェンダー問題を無視し、見逃し、周辺に置き去りにしてきた。しかし、過去 15 年間に、こうした「沈黙」はフェミニズムの視点に立つ学術的論文と理論研究からなる新しい集大成の出現によって、もはや後戻りすることのない終りを迎えた。ここで二つの論文を取り上げてみよう。一つは、(控えめに言って)女性と国家主義的プロジェクトとの多義的な関係、および国民国家と特定のジェンダー体制との関連に重点を置いている。いま一つは、(大まかにとらえて)「西側」の先進資本主義社会の経験とアジア、アフリカ、中近東にある植民地・半植民地・ポスト植民地世界の経験との違いに重点を置いている。

『父権政治の理論』を書いたシルヴィア・ウォルビーは、主に西欧の民主主義に焦点をしばり、参政権と法律上の平等という原理に基づいて、近代の国民国家が、どのようにして家父長制を私から公に変形させたかを論じている。容易に国家に接近でき、市民権が手に入れられることで、もはや公領域から排除されることのない女性に対する男性の支配が基盤から崩壊されてしまっている。しかしこれによって、男性支配の国民的な共同体の下で、新たな女性の従属と彼女たちの労働搾取が生じている。こうした家父長制の変化とともに、女性の出産、家族への責任、軍などのような「全国的／男性的」領域へのアクセスなどに対する国家支配に対して、新たな形の大衆闘争が出現している。

以下の 4 人はわれわれをヨーロッパに連れ戻す。アメリカの著名な文化人類学者で、ルーマニアのチャウシェスクと彼のエビゴネンたちを研究し、そのことによって苦しんでいるキャサリン・ヴェルデリーは、近代国家が、自治と福祉の約束という 19 世紀から伝えられた正当化のための使命を果たすことがますます困難になりつつある状況の中で、国民の象徴的な意義が変化した、と論じている。同時に、そして部分的にはまさにそのために、国民と個人との間でみられる、深く内面化した、均質的な同一化がますます重んじられている。エスニックかつ人種的なステレオタイプ化、

外国嫌い、偏狭な「多文化主義」、そしてより野蛮な同一化政策は今後波のように押し寄せてくると思われる。しかし、これは逃れられないことである。というのも、「自然の条件として、あるところで生まれたということが人間の生存の根本となる」からである。

ヴェルデリーの控えめな悲観論は、エリック・ホブズボームによって強調されている。現代イギリスの最も著名な歴史学者であるホブズボームは、ボルシェヴィキ革命の年に生まれ、ナチズムの暗雲がヨーロッパを覆っていたときに、ウィーンで育った。彼はファシズム国家の破壊、そして、ファシズムの勝利を可能にしたソ連の崩壊を目撃してきた。ソ連に対して、長い間、彼は批判的ながら同情を抱いていた。国際的なユダヤ系の博識家でありながら、自分を保護した多人種社会イギリスに強い愛着をもっているホブズボームは、ヨーロッパの「新しいナショナリズム」に対してまったく歯に衣着せぬ意見を出し、ナショナリズムが統合的であり、解放のためのものであったマツツイーニの時代はとっくの昔に終わったと主張している。今日ナショナリズムに関して洗練された著作がありあまるほど出ているのは、彼の判断の正しさをまさに示すものであり、こうしてミネルヴァのフクロウはようやくたそがれに飛ぶ、と彼は非常にうまく書いている。

少なくとも 1970 年代後半から、ホブズボームはトム・ネアンと激しく、啓発的な議論をしてきた。『連合国の国体』の著者であるネアンは、マルクス主義者のかたわれであり、スコットランドの民族主義者であり、その最愛の対話者であるイギリスの衰退を徹底して批判している。先に触れたチャタージーとは異なる立場に立っているが、コスモポリタン気質の知識人たちの傲慢な見せかけに対する長年にわたるネアンの批判は、チャタージーのテーマと何ほどか響き合っている。彼の批判は、以下の議論と結びついている。すなわち、われわれの時代において最大の人間破壊をもたらしたのは、巨大「統合」多国籍国家-イギリスが最後の生き残りになっている 19 世紀の巨大な王朝体制に加えて、20 世紀の大ドイツ、アメリカ合衆国、ソ連、隠れ清朝の中国、旧王権のインド-にほかならないという議論である。ここから、ネアンが上述の政治的ゴジラによって作られた一連の世界「秩序」の全般的な崩壊と見なすものは、より魅力のある、より実りの多い「無秩序」へと導くと解釈されることになるの

である。因みに、この無秩序状態において、19 世紀に見られた完全統治への強い願望に代わって、真にポスト帝国主義的なナショナリティをもつ複雑で相互作用的なコミュニティがあらわれるのである。それが実現するには、民主主義や地域政治参加の発展、さらに人権を守る体制のグローバルな制度化が最も必要であろう、とネアンは言っている。

マクロ社会学者であるミカエル・マンは、近代的制度、とりわけ国家の発展を理解するために世界史の比較研究を行ってきた。近年、このような研究を彼ほどやっている学者はいない。マンの欧州共同体 (EC) についての観察は、成熟した国民国家に関する広い視野からなされたものである。政治的・社会的市民権という概念を持つこうした成熟した国民国家は、妥協の産物であるとしても、長期間にわたる階級闘争に基づいて生じた 20 世紀の現象である。彼は、湾岸戦争の時に発言をしたベルギーの無名の大臣のこぼれを引用している。その大臣は、「欧州共同体は経済的には巨人であって、政治的には小びとであって、軍事的には虫けら同然だ」と発言した。続いて、マンは「ほとんどの国家政策は税金、所得政策、福祉政策、道徳問題、外国の危機に関するものであり、これらは EC が扱うものとは考えにくいし、実際そうではない」と述べている。さらに、かりに、超国家的な勢力が何かの形で国民国家の統治権を削り取っているならば、その国家は、州や地方制度、民間団体を犠牲にしても、統治権を徐々に拡大していくであろう、と考えている。マンはまた、今日、金融資本が国際的にとてつもない移動をしているにもかかわらず、国民の大量生産は国内市場のためのものであり、「多国籍」企業も本社と研究所を特定の国の空間に立地している、と強調している。

以上のことから、マンは、国民国家は衰退するところか、世界の舞台で大きくなっており、しかも貧しい国々は効率的な国民国家の要件を欠いていると主張している。この欠如を克服するのに何年かかっても、それが貧しい国々のめざしているところである。他方で、彼は、スウェーデンの社会民主主義の成果さえもが「国境を超えた財政保守主義」によって脅かされているとするなら、社会主義者は「自分たちの国民国家の内部からみつめるのをやめて、国際的レベルで権力を行使す」べきであるとみており、また「歴史的に国家を

最も強くした階級運動が、現在では国家をくつがえすようになりはじめてい。」と述べている。

ユルゲン・ハーバマスは、まぎれもなくわれわれの時代において、最も幅広い影響力をもつ政治哲学者である。もし、ヴェルデリーの悲観論がホブズボームのそれよりも控えめで穏健なものであるとするなら、さしあたって、アドルノの後継者である（そして奇妙なことだが、おそらくはアクトンの後継者ともいえる）ハーバマスはネアンとマンの楽観論の方に近いであろう。金融と労働市場のグローバル化が持っている破壊的な性質、後期資本主義社会における半永久的なアンダークラスの創出、そして、領域を超える拡がりをもつ数多くの問題に対して国民国家がそれを構造的に解決する能力がないことについて、ハーバマスは十分に認識している。それにもかかわらず、彼は、19世紀の政治的革新—とりわけネアンも強調した近代の共和制、代議制民主主義、立憲政治—が、閉ざされたナショナリティへと下方に向かうよりも、超国家的な領域へと上方に拡がるべきである、と主張している。欧州共同体 (EC) は、欠陥だらけであっても、正しい方向に向かっている。それは、特にこの共同体がきつと何らかの新たなレヴェルで、一連のいらいらしたナルシスト的なものではなく、啓蒙運動から生まれた超民族文化的な「共和」国理念の内部にあるものの、それとははっきり違うローカルな文化的連帯を合理的に統合するという意味での多文化主義の原理を大切にするとと思われるからである⁷⁾。この視点にたつて、ハーバマスは、ジェノヴァ、リオデジャネイロ、カイロ、北京で最近開催された世界的課題を取り上げた国際会議で取り上げられた彼が「世界国内政治」と呼ぶものの可能性について語っている。

注

- 1) 他の二つは、貴族政治制度を標的とする平等主義と私有財産制に反する共産主義（ここではアクトンはマルクスよりも、バブーフを念頭に置いている）である。
- 2) 大オーストリア合衆国に関する詳しい説明は、彼の論文 (Werkausgabe, Vienna 1975, vol. 1, p. 482) を参照。

- 3) ここで留意すべきことは、パウアーが共通語をその国に特有なものとして述べないように注意していることである。パウアーは、スペイン語や英語を共通語として利用する国は数多くあるが、それらの国々が共通語を自分のものとして独占しようとしていないことを認識していた。同様に、彼はチェコ語やハンガリア語を抑圧しないで、ドイツ語が大オーストリア合衆国を含めたヨーロッパ諸国の共通語になる可能性を冷静に見ていた。これをみれば、保守的なアクトンと社会主義者パウアーが、まったく違った理由であるにせよ、なぜウィーンを中心とした巨大な政治領域に重要性を置いていたかがわかる。
- 4) コーン (1891-1971) は二重君主制の下にあったチェコの民族主義的首都プラハで育った。彼はシオニズム青年運動に積極的に参加し、その後、エルサレムを本拠地として拡がった近東ナショナリズム運動の研究者となった。彼の代表作は 1922 年に発表された『ナショナリズム』である。長年コロンビア大学の教授を勤めた、ほぼ同時代のヘイズ (1882-1964) は、1926 年に最初の主著『ナショナリズム論』を発表した。奇妙なことに、彼はルーズヴェルト大統領の時代に、フランコ体制下のマドリッドで戦時大使を勤めた。
- 5) ナポレオンとヒトラーが 1 世紀半にまたがって作った短命の帝国に対して中央ヨーロッパと東ヨーロッパで起こった思いがけない強い反応には、表面的な類似以上のものがある。ナチの攻撃がもたらした一つの重要なものは、共産主義とナショナリズムの混交であり、これによって、戦争中に可能に見えたソ連への合併が戦後にはより信じがたいものになった。比較できる混交は、1937 年から 1945 年まで日本の軍国主義の残酷な支配下にあった東アジアと東南アジアにも見られた。そこで例としてあげられるのは、毛沢東、チトー、ホーチミン、金日成、そしてホッシャである。
- 6) こうした運動の出現の理由は非常に複雑であつて、ここで探るのは困難である。しかし、これらを植民地帝国の戦後の崩壊と関連させる価値はあるであろう。植民地帝国の崩壊は帝国の中心地の名声と魅力を減少させた。そしていかなれば、「ナショナリティ」をもつ活動的な若者たちをアンゴラ、アルジェリア、インド、コンゴへ送り込んだ安全弁が取り除かれた。同時に、欧州共同体のメンバーになることによって、西欧でいまなお見られる統治権に関する絶対主義的主張は従来よりも説得力を失っている。
- 7) コール政権のドイツ再統合に関して、ハーバマスは疑念を抱いた。彼は大ドイツのショーヴィニズムを抑える見込みのあるものとして、欧州共同体の可能性に明らかに期待している。